日本大学工学部

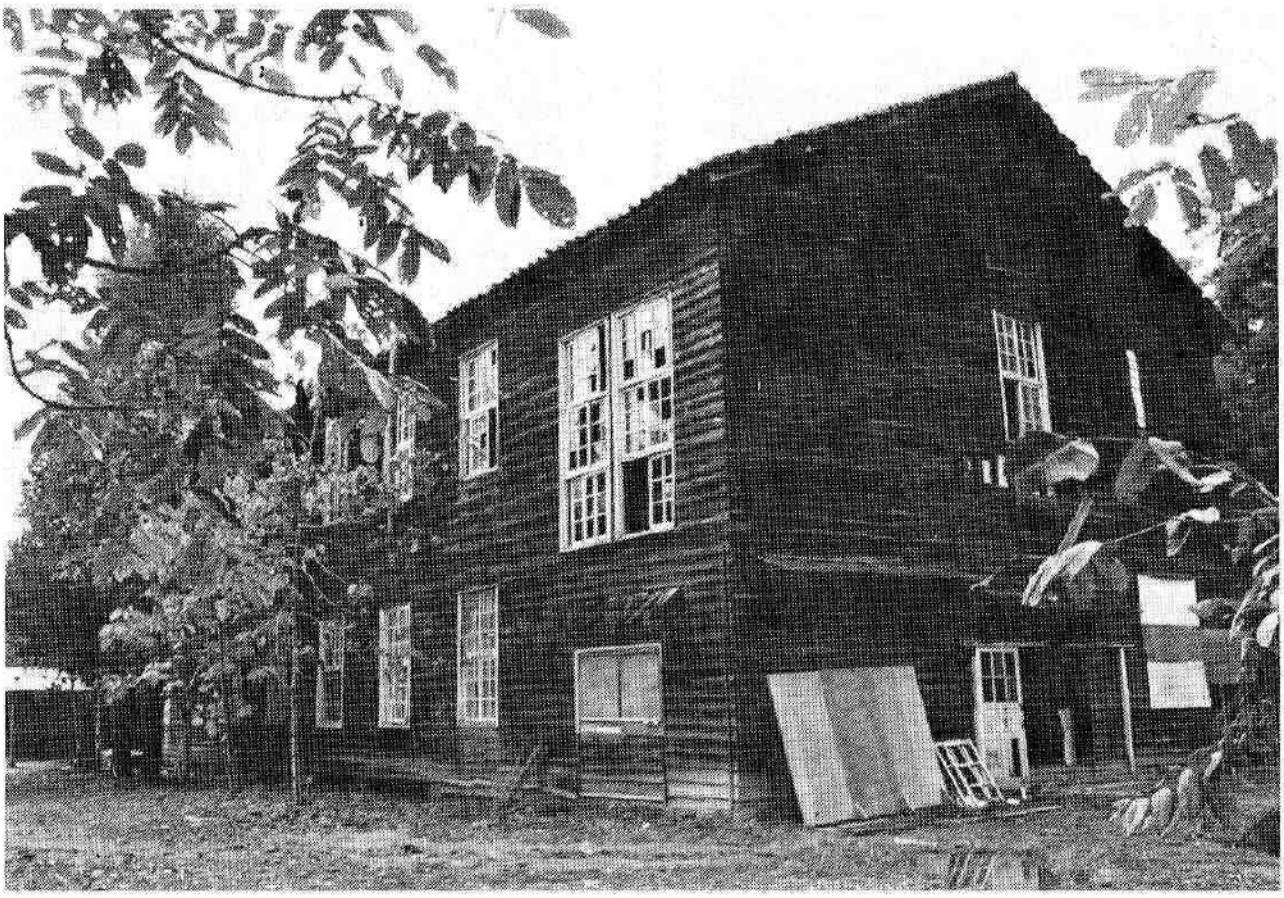
校友会報

第 28 号

昭和51年 3 月 1 日

目　　次

日本大学評議員御挨拶……2
ネパール・ヒマラヤ
トレッキング記……2～3
パリ短信……3～4
工学部の新施設の近況……5
学部祭盛大に終了……5～6
今年は辰年……6
クラス会・ＯＢ会の報告……6～7
故中野教授図書贈呈……8
事務局だより……8



（解体前の旧木造一号校舎）

昭和22年以来校舎として一棟だけ当時の姿のまま残されていた旧木造一号校舎も、最近では老朽化はなはだしく危険な状態になったため、50年12月末解体除却されました。

御　挨　拶

日本大学評議員　太田雄八郎

このたび、私は、日本大学工学部校友会の推挙により、昭和50年9月10日付日本大学本部辞令をもって、向う三年間日本大学評議員の要職を勤めることになりました。日本大学評議委員会は、日本大学の将来をも決する重要な機関でありまして、諸先輩、諸先生方によって構成されております。

もとより、若輩の力、及ぶべくもありませんが、日本大学工学部校友会の意気と名誉にかけて、日本大学発展のために、能うかぎりの努力と、活動をするつもりであります。

あの未曽有の嵐のあとに生まれた、新生日本大学は、民主々義の大原則にのっとり、広く会議を経て、諸々の学校法人活動を決しております。

私も、本会々員、13,000余名の代表として、重責の一端を担うものでありますから、会員の皆様におかれましては、よろしく御指導御鞭撻の程、御願い申し上げる次第です。

甚だ、略儀でありますが、日本大学評議員の命を受け、所信を述べさせていただき、御挨拶といたします。

（筆者、土木工学科第3回卒業、郡山市役所土木課長）

ネパール・ヒマラヤトレッキング記

花井　馨

昨年暮れの27日から1月中旬まで、5人の山仲間でネパールヒマラヤを眺めるトレッキングに出かけて参りました。簡単にこの模様をのべ参考に資したいと存じます。

トレッキングとは、ゆっくり歩く旅とでもいいましょうか大変おもしろい旅の方法だと思います。専門の観光会社に料金を払い込むと、パスポート申請に必要な手続、予防注射のこと、先方の入国許可やトレッキング許可その他すべてセットにして世話してくれます。まあここまでは普通の団体さんの旅行と同じでしょう。さて歩きはじめるにあたっては登山の専門家であるシェルパサーダー（責任者）、シェルパ・クッカーキッチンボーイ、それに全部の荷物を運ぶポーターが、我々の目的や人数によって割りあてられ加わってきます。このたびは我々5人に対しサーダー1名、シェルパ1名、クッカー1名、ボーイ2名、ポーター10名がついて豪勢なパーティーになりました。この連中は、いずれもかつて外国の登山隊と一緒に山々を征服してきた者ばかりで、特にサーダーやクッカーは英語はペラペラ、日本語もたくみにこなせるという優秀な山男です。目的どおり従順にかつ状況によってはきびしくしかも手順よく我々をリードしてくれました。

これらの人々との交流に実は大きな意義があるのです。

さて会社の引率者にひきつれられて羽田を発ち、バンコク、カルカッタを経由してネパールに入り、首都カトマンズに2泊して小さな飛行機でポカラという町まで飛び、歩きはじめました。毎日13～15kmの山道を歩きながら進むのですが、道中接する村人たちとのやりとりが大変印象的でした。全行程歩きなので足に自信のない人ではとても無理でしょう。それでも目的の山々がすぐそこに豪快に眺められはげまされました。

実はすぐそこに見えても、ものすごく遠い訳で、山の大きさを思い知らされた感じでした。1月2日には第一の目的であるゴラパニ峠に着きましたが、ここの丘（3,000m）からみるダウラギリ1峰（8,169m）は、アッという迫力で、とても筆舌では表現できないすばらしさです。ヒマラヤヒダに映える夕陽が印象深く、あゝここまで来たかとつくづく思いました。

ここから進路をかえて第二の目的地アンナプルナ山群のふところへ向います。水や食べもののせいか食欲はへるし、つかれがたまったり苦しい日程でしたが頑張って旅を続けます。アンナプルナBC付近からの眺めは

はまた格別で雪と氷の殿堂といいましょうかとにかくすばらしい景色です。しかし高度が4,000mを超えているので酸素の影響で頭はいたいし、息が切れ、顔はムクんでひどいものです。また日中は大変暖かいのですが夜は零下10℃以下になります、やはり高さを思いしらされたというところです。ここでは5人それぞれの目的で別行動をとりました、2人は写真撮影、3人は高度に挑戦。5,000mを超えた1人は頭をおさえ

ながら降りて来て、ひとこと「山はでっかい」これがヒマラヤの実感でしょう。
一応それぞれの目的を達して帰路についたのですが、これが又大変で、5日間の歩きには可成こたえました（これは私だけで、あとの4人は若いので大したことない様な顔でした)。しかしシェルパやポーターたちとのかたらい、そして部落の人々との交流いずれも良い想い出になるものばかりです。かくして無事帰国した訳です。

紙面の関係で以上概況だけ述べました。
ふりかえって裸足の人々、灰土色の部落や風景、布をまとった子供たち、牛馬糞のにおいのしみこんだ生活そして雄大で豪快、高く美しいヒマラヤの山々と接した旅のなかから、さまざまのことを感じとることが出来、大変良い旅であったと思っています。そしてネパールの人々がいつまでも幸せであることを念じたいと思います。
出発に際して校友会からご配慮を賜りましたが厚くお礼を申しあげます。

ネパールの旅は楽しく、ヒマラヤはすばらしい。

（筆者、工業化学科第3回卒業、郡山市中央公民館副館長）

パリ短信
“白眉の都市・PARIS”

吉富信介

今度、留学のため、新築されたばかりのCharle de Gaule 空港に降り立ったのは、一昨年の近年異例とまでいわれた、大変底冷えのするある初秋の早朝であった。爾来約1年3ヵ月Paris の住人として糊口の生活をしているわけである。

旅行案内書等によればParis は花の咲きみだれる春たけなわの5月・6月とか、マロニエやプラタナスの枯葉が陽光に輝く9月ならば、旅行者の期待を裏切らないが、しかし冬に入り、毎日のように空は鉛色の雲に厚く閉ざされて、まことに陰うつなParis を訪れるなら、すっかり意気消沈してParis 嫌いになる歳れも十分あると記されている。私の三度目のParis 滞在も前例と同様、太陽とは全く無縁の鉛空におおわれた、重苦しい日々を通して始まったわけで、翌年、部屋暖房が完全に切れる5月まで、私もParis 嫌いの1人になっていたようである。

しかし、私の寓居のある、大学都市内の樹々が一斉に新緑の若葉をつけ始め、それを喜んでいるのであろう。小鳥のさえずる梢の下で、青年男女が忘れかけていた蒼穹に向って、各自の肉体美を競っているかの様に、日光浴を始める－こういった現象は日本では決して見ることは出来ませんが一頃になってはじめて、以前より勝手に作りあげていた、自分のParis 像と現実とが同調し、Paris に来て良かったなと思いはじめた有様でした。又その後、夏期休暇を利用して、ヨーロッパの十数ヵ国を旅行した折、各国の主要都市を訪れその一つ一つを常に自分の居るParis を基準として比較していたようである。そして各都市に、それぞれ土地柄お国柄があり、なかなか相互の評価の難しいのは勿論であるが、旅の終りには以前と変って、Paris 心酔者の一人になっている自分を発見した次第である。

Paris といえば我々日本人にとっては勿論のこと、西洋人に対してさえも特別の響きを持っているようである。それはおそらく2,000年の歴史を誇るこの街全体が、一種の文化博物館の観を呈しているからであろう。なにしろParis の中心部に残された楕比の家並みの中で、最古のものといわれるのは、3 Rve voltaにある13世紀もしくは14世紀に溯るのであり、そこに今なお人が住んでいるのであるから驚かされる。近年まで木と草と紙で造った家に住み、地震や暴風雨といった、自然の猛威を諦観してうけとめてきた我々日本人と異なり、ヨーロッパの伝統は、気候的にも大変穏やかで、合理的自然を書割として、大地は動かぬもの、家は朽ち果てず、何世代にわたって使用されるものという確固たる信念に支えられているように思えてならない。近視眼的な物の考え方しか出来ないといわれる日本人と、百年の計を立てる西欧人との相違の一因も案外このようなところに見出せるかも知れない。

現在のParis 市は東西12km、南北9km、周囲36kmの楕円形をなしており、ナポレオン3世時代1853年から1870年にかけて、当時のセーヌ県知事をつとめたGeorges Eugene Haussmann が暴動鎮圧の治安的目的をも含めて大金を費して実施した都市計画の産物である。その後第3共和制（1871～1941年）の下で道路、上水道ガス、下水道等々の整備拡充が続行され、Eiffel塔（1889年の万博記念)、地下鉄（1900年開通)、Grand－Palais（1900年の万博記念）のような鉄の世紀、アール・ヌーヴォーの時代を代表するような記念建造物が

生み出された。街の外郭をとりまいていたThier の城壁（1840～1844年構築）も1919年とり壊されて、緑地帯や環状自動車道、大学国際都市等が生まれた。

Paris 市の人口は1801年—546,856人、1846年—100万突破、1861年— 1,667,841人と増加の一途をたどり1921年— 2,906,470人とそのピークを記録したあとは1925年—2,725,374人、1954年—2,850,189人、1962年— 2,811,171人という風に、ほぼ横ばいとなっているしかしParis市を中心とした、いわゆるParis地方(1961年広域行政区画として誕生、現在フランスはここの地方に分れている。)は益々膨張を続け、1954年—6,436,140人、1959年—7,125,000人、1962年—8,469,863人、1968年—9,250,674人を数え将来1978年—1,138万人、1989年— 1,280万人と予測されている。

〝パリとフランス砂漠〟という言葉があるように、中央集権的傾向の強いフランスだけに、人口の大都市集中現象は我国同様きわめて顕著である。フランス全土の0.0002%のParis 市(10.523*ha*)の人口密度は24,580人／㎢と平均92人／㎢をはるかに凌駕しており、そのため土地利用は重要な意味をもち、老朽建築物の建替が盛んである。さらに交通難が加わって中央市場も既にParis南郊オルリー空港の近くに移転し、その跡地には大公園が誕生することになっており、その地下には、郊外線乗入の為のターミナル駅が現在建設中である。また1934年に立案に着手したMaine -Moutparnasse 計画も1958年以降着工され、モンパルナス駅、185m 55階建のTour Maine -Moutparnasse 超高層ビル、1,200戸の住居、20万㎡のオフィス、12万㎡の駐車場及び大型ホテル等の近代的区画が完成を間近にしている。

ルーヴル宮(1667～1856年)の庭にあるカルーゼル凱旋門(1808年)からコンコルド広場、シャンゼリゼ大通り、エトワールの凱旋門(1806～1836年)に至る長さ3㎞近くの眺望はParis 屈指の美しさを誇っているのだが西郊デフォンス地区の開発によって、高さ190m級の超高層ビルが統制のとれたParisの屋根の上にその頭を持ち出しはじめた。その為に都市の美観が急激に破壊されつつあることも事実で1972年夏には、美観擁護派による一大反対キャンペーンがくりひろげられるに至った。中心部のRoud-Point de la Defenseに1959年正三角形の一辺200m 、床面積90,000㎡という巨大な国立工業技術センターの建物が登場し、種々の展覧会場などに利用されたのをきっかけに、1980年をめざして、副都心的計画が展開されている。E .P .A .D .という公団がこの建設にあたっているが、完成すれば、セーヌの対岸に29の高層ビル、4つのホテルを擁するオフィス街と、25,000戸の住宅団地が誕生する。1964年の当初計画では80万㎡のオフィス街と 4,500戸の住宅という規模だったのが、150万㎡、25,000戸に脹れ上ってしまった。この計画が実施に移され、170m 級の超高層ビルが現実のものとなってはじめて世論がわきたった。しかし結局当時のMesmer 首相の裁断で計画の続行が決ったようである。巨額の投資その他の関係もあろうが環境汚染同様、当今の人間の行動は一度動き出すと、どうにも止まらぬものらしい。こうなると都市の美観とやらも、経済成長の神話のかげに色あせて消しとんでしまう。

色々物議をかもしながらついにParis の象徴となったEiffel 塔も老朽化して取り壊しが噂されるように、Paris もこのところ急激に変貌をとげつつある。宿世の文人や芸術家ゆかりの界隈もいずれ観光客向けに博物館化するか、取り壊されてあとに〝何々某住居跡〟といった記念標識がつけられることになりそうである。残るのは官公庁が使用している非公開の建物ぐらいだろうとある新聞が皮肉っていたが、特に我々外国人にとって白眉の都市・Paris の先行も決して明るいものではないようである。由来遺跡の類は現代人の生活とは相容れぬものなのだろう。とすれば我々は〝文明の進歩〟との引換に過ぎ去ったありし日の永遠の美しさを想像の世界に追い求める以外にないのであろうか？。それにしてもNew York のような20世紀の摩天楼はどのような遺跡と化すのであろうか知りたいものである。

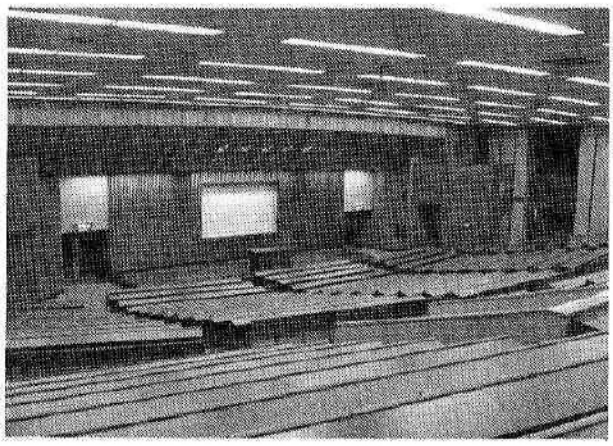
工学部の新施設の近況

佐藤満夫

1．中講堂完成

かねて念願の中講堂が竣工し通常講義室として使用されている。場所は現図書館東側、旧校友会館跡に建築されたもので、構造は鉄骨鉄筋コンクリート造4階建で延面積3,183㎡である。1階に230名収容の階段教室2部屋で、各科の実験講義も出来る設備とした。2階は大、中、小3つの会議室となっており、床はジュウタン敷、壁はハマウッド練付仕上となった豪華な会議室である。3階4階が700余名収容の階段式講義室で〔写真5〕主に集中講義又は講演会等に使用されている。

建物外装は薄いベージュ色の小口平タイル貼り、アルミサッシュは自然発色（ブロンズ）仕上となっています。建物周辺は庭園計画がなされ現在整備中である。



【写真5】

2．研修会館新築中　〔写真6〕

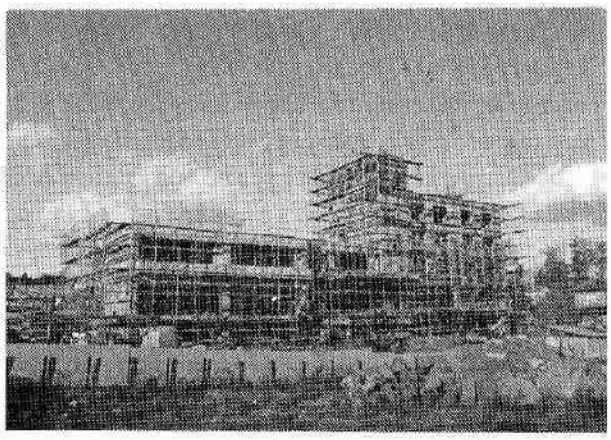
郡山市の景勝地荒池公園に隣接して、南面ゆるやかな傾斜の丘陵地日本大学工学部用地（2,540坪）がある。この敷地にかねて計画中の工学部研修会館が新築中である。

研修会館の利用については、日本大学関係者で、学生、教職員はもとより校友等の各研修に利用できることを主旨とした。構造は鉄筋コンクリート造地下1階地上4階建で延面積1,660㎡である。

写真のとおり建物左側がセミナールーム部分2階建で1階はテーブル式講堂約100名収容、2階は和室で畳54帖敷の講堂となっております。

建物右側部が地下1階地上4階で地下部分は機械室浴室等が設備され、地上部分は1階食堂、2階から4階迄8帖間12部屋が宿泊室として設計された。

各室からの展望は、郡山市街はもちろんのこと東南



【写真6】

に阿武隈連峰、西南には那須連峰が眺められる。

又北側には荒池公園、遠く阿達太良磐梯の山々が望まれる。建物周辺は散歩にはもってこいの緑地帯とあって51年4月末の完成が待たれている。

3．構内汚水排水終末処理場完成

学内の汚水、雑排水を一括処理する終末処理場を、製図棟とテニスコートの中間に完成現在運転中である。処理方式は長時間曝気方式900㎥／日の処理能力を有し、曝気槽は活性汚泥方式で微生物による処理と酸化がおこなわれる。

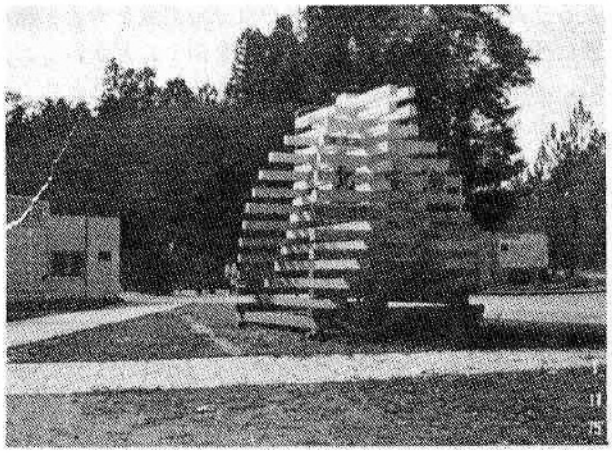
4．ライフル射撃場完成

俊英寮南側にエアライフル専用の射場が完成した。日本ライフル協会の規定に基づいた公認射撃場である。工学部射撃クラブでは他大学との公式試合も予定されているりっぱな施設である。

（筆者、第6回建築学科卒業、専任講師・管財課長補佐）

学部祭盛大に終了する

日本大学工学部学部祭(北桜祭)は、昭和50年10月31日から11月3日まで、例年のように、在学生等若人の意

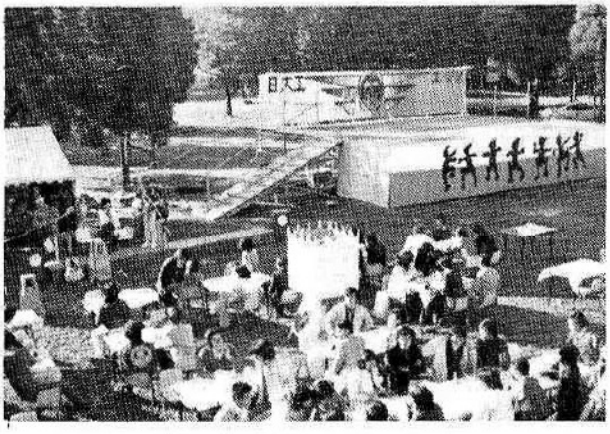


気と情熱を投入して華々しく開催され、予想以外の成果を上げ、無事終了しました。

もう、すっかり郡山の地に知れわたった名物行事であり、連日、多数の参観者が来校し、楽しい一時を過ごして帰って行きました。

校内では、日頃の勉学状況や、課外活動の様子の紹介、更に、ボランティア活動の実践など、現代学生気質の端々がうかがわれ、日大健児健在なりの感、益々深めました。

校友の皆様におかれましても、学部祭は訪学の好機であります、特に本年は、市内荒池に研修会館も完成しますので、御利用なされ、恩師と共に、黄金の昔日を語らっては、いかがでしょうか。



＊＊＊今年は辰年＊＊＊

12支には12匹の動物がある。辰年以外の動物は全部実在するが、なぜか辰年だけが架空の動物である。辰の落し子と云うものがあるが、落し子だけで親は実在しない。そんな訳で現実に存在しない干支を持っているのは、辰年生れだけである。辰は竜と同じであり、想像上の動物で体は大蛇に似て背に81の鱗があり、面は獰猛で、角、耳、ひげを有し、水にひそみ、空にかけり、能く雲雨を起すという。辰年生れの諸君、昨今の激動する社会情勢下にあって、迷うことなく起上る竜となり、それぞれの目標に向って意慾的に取組み今年もベストをつくす年男になるよう切望してやまない。

辰年生れの運勢　(24才・36才・48才・60才)

辰年生れの人は気位が高く勝気のため、難事によくたえる性質だが、その事の善悪や自分の力量を考えず無理に押し通そうとして意外の失敗を招くことがある。ずいぶん変化のある運命で人のうらやむような成功をするかと思えば、たちまち驚くほどの衰運に陥ることもある。生来慈善心に富んでいるので人に立てられ、人の長となる特質があるから、よく自己の性癖を陶冶し修養につとめたなら、元来が運勢の強い性質であるから中年あるいは晩年の初期に一大良運を獲得し、これをよく保つ事ができたならば、晩年は他人のうらやむ生涯を送ることができる。

(神宮館運勢暦)

クラス会・OB会報告

◎あかしやファイト親睦会
◎学部訪問記
◎工業化学科第16回卒クラス会

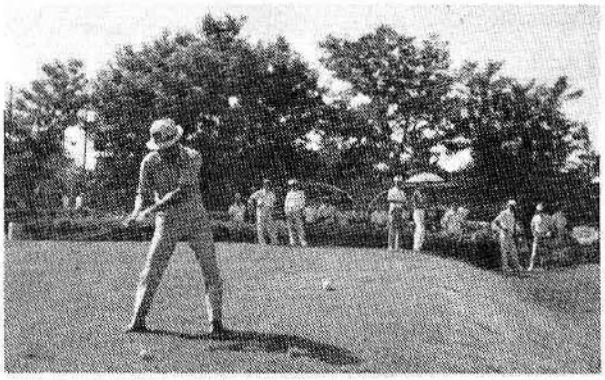
「あかしやファイト」親睦会

小池武志

機械六回卒業同期生による「あかしやファイト」親睦会は、今年で5回(2年に一度)を迎え、「東京よみうりランド」において、家族も参加し、昭和50年6月26日、27日に行われました。

第1日目の26日は「あかしやファイト会」第1回のゴルフ大会を東京よみうりC・Cで開きました。新潟から山崎君(東北電力)、名古屋から川井君(ワシノ機械)を始め遠方から会員20名が参加、優勝杯(持ち廻り)をかけての熱戦を展開、真夏の太陽に照らされながら、珍プレーも続出し、なごやかな大会であった。

夜は、家族を交えて表彰式と親睦会。そしてよみうりランドの花火大会と、夜が更けるまで郡山時代の話に花を咲かせた。



翌日は、マンモスプールで泳ぐ者、ランド内を見学する者、子供と遊園地で遊ぶ者と、日頃多忙の会員も父親としての家族サービスに満足そうであった。

優　勝　安藤芳博(日本トラウブ)
準優勝　山崎義勝(東北電力)
三　位　小池武志(自　　営)
ドラゴン　伊藤幸明(自　　営)
ニアピン　川井力甫(ワシノ機械)
B・B　梅本貢一(三愛石油)

学部訪問記

日本大学工学部自治会ＯＢ会
あかしや会事務局　稲葉孝夫

私が前回学部を訪問したのは、昭和43年暮でしたでしょうか、例の学園紛争当時、自治会ＯＢ有志とともに外木先生にお目にかかり、さらにバリケードの中で工斗委委員長とも会い、両者の話し合いの場を作るべく試みたときでした。しかしながら試みも不調に終り焼け爛れた時計台を背にしたとき、母校の将来に大きな不安を抱きつつ、学園を去ったのでした。

それから７年余も経ったことになりますが、去年５月24日、北は岩手より、南は九州からの学部自治会ＯＢ17名は久し振りに母校を訪問する機会を得ました。田嶋学生課長の案内で学内を一巡致しましたが、私の在学当時より建設が始まった図書館、大講堂を始め、新実験棟、武道館、プール、部室、さらに建設中の新校舎、排水処理設備等、正に目を見張るものばかりでありました。また立派な駐車場には時の流れを感じさせられました。私達当時を忍ぶものとしては自治会室クラブ部室として使用していた木造校舎が、大講堂のわきに残っていたことと、名物あかしやの林でありましょう。母校の発展を喜びつつも、唯一の木造校舎は近く取毀されると聞き、一抹のノスタルジアを禁じ得ませんでした。

学内見学後、外木学部長、一色先生、田嶋学生課長との懇談会におきまして、数多くの話が出てまいりましたが、その中で第６回卒業（昭和32年度）の板屋氏が、「私の在学当時は、実験室といっても木造で雨が降れば雨漏りがし、中に入っても一山の砂利とフルイが置いてある程度で、何か実験を始めようとするときは、まず道具から作り始めなければならなかった私達の頃とは隔絶の感がある。現在の皆さんを羨しく思います。」と述べられた感想に各ＯＢの思いが集約されているといっても過言ではないでしょう。設備の点にも、教授陣の点においても、不十分であった当時、第二工学部の部名問題を手段として、学部の改善を求めていましたが、それ等がほぼ現実のものとなっている現在、学生諸君がそれ等をいかに有効に利用するかということが、今後の学部発展の課題の一つとなることでしょう。その他「学部所在地」の点から東北地域社会との連帯を深める機会を多く作って欲しい。」「あかしやをなるべく切り倒さぬよう。」などの要望も出されました。

その夜、学部長を交え、東磐梯寮にて懇親会が行われ、夜の更けるまで語り合いまして、翌朝、学部再訪問を約し、解散致しました。

現在、学部には学生自治組織がないことを自治会に携わった者としましては残念に思いますが、何時の日にか健全なる自治組織が生れることを期待しております。

なお、日本大学工学部自治会ＯＢ会――通称あかしや会――は、学部並びに校友会との交流をさらに深めてゆくとともに、会員相互の連帯も強めてゆきたいと考えております。

自治会関係者の御一報をお待ち致しております。

（筆者、第15回工業化学科卒業、　　）

クラス会報告

昭和42年度工業化学科卒業生である私達は、すでに一名の校友を亡くしていますが、五十余名の小世帯で、度々関東圏ではクラス会を開いていましたが、昨年は、７月19日（土）に初めてなつかしい郡山で開きました。当日は父兄懇談会などのため諸先生には御会い出来ませんでしたが、15時管理棟玄関前に集合した私達一行23名は、珪酸塩研究室の小川先生の案内で講内を、多々想いを胸に見学いたしました。新実験棟、武道館、プール、各サークルの部室棟、校友会館など、私達が在学していた当時とは大変な違い様だ。嬉しくもあり、ちょっぴりうらやましかった。

さて18時から本会場を市内に移し、岡山から来たのが最遠来の友で、総勢25名となり。司会の巧みな誘導にもかかわらず、この７年の経過と近況報告にヤジや応援の伴奏でたっぷり２時間ほどかかってしまい予定の時間となり、一次会は終了することとなった。

学生時代の面影そのままの者、当時とは打って変って落ち付いた者、など、面々は、初め堅かったが、すっかり学生時代にかえり、二次会ともなるころは、身も心も現実から離れ、楽しい一時を送りました。

ともあれ、皆、それぞれ良く努め、頑張っているのが判り、小生等も又大いにやらんかの気構えに燃えているのであります。

（工業化学科第16回卒業、岡野平太郎・松尾孝幸記）

故中野教授図書贈呈

昨年御亡くなりになられた、日本大学工学部機械工学科教授中野格致先生は、工学部の学術研究、並びに教育事業の振興のため、御遺志により、日本大学工学部に図書代として50万円を寄付なされました。

本学創立の第一人者である先生は、本学の地方都市に位置する不利を補なうには、図書館の充実こそ、最も効果があると申しておりましたが、御遺志をもって改めて、この信念を表明されたのであります。

母校では、館長、広川友雄教授のもとに、早速図書委員会を開き、購入図書の検討がなされました。

事務局だより

昭和51年3月1日

日本大学工学部校友会
会　員　各　位

福島県郡山市田村町徳定字中河原1
日本大学工学部校友会
会　長　松山光克

昭和51年度総会通知

全国各地において御活躍の校友諸兄姉各位には、愈々御健勝のこととお慶び申し上げます。
さて、校友会会則第29条により日本大学工学部校友会昭和51年度定期総会を下記計画にて開催いたしますので、先輩・後輩をお誘いになられ多数御出席下さいますよう御通知申し上げます。
なお、欠席の方は議事一切について委任なされたものと認めますので御了承お願いいたします。

記

1．日　　時　　昭和51年5月23日（日）　午後1時
2．場　　所　　工学部研修会館　（郡山市愛宕町）
3．付議事項　　第1号議案　昭和50年度会務報告
　　第2号議案　昭和50年度会計決算報告
　　第3号議案　昭和51年度事業計画並びに予算案審議
　　第4号議案　昭和51年度役員選出
　　第5号議案　その他

追伸　諸般の事情により校友会報第28号に掲載の上記案内によって総会通知としますので御了承願います。

(1) お願い

1. 会員名簿の実費納入について。
　昭和50年版の工学部校友会会員名簿を、前年の10月に発行して校友各位に送付し、同時に、実費1,000円の御納入をお願いしましたところ、多くの方々が御協力下さって誠に心強い次第であります。未納入の方は至急御送金下さるよう重ねてお願いいたします。

2. 終身会費の未納の方へ
　このことについては、名簿発送の際同封にて文書により納入方を依頼しておきましたので、御承知のことと存じます。よろしく御協力の程をねがいます。

3. 住所・勤務先の変更や改姓等の場合には直ちに事務局へ御連絡下さい

(2) 確認してほしいこと。
　卒業年と卒業年度との関係を確認して下さい。
　例えば
　① 昭和50年3月卒は　昭和49年度卒業生
　② 昭和35年3月卒は　昭和34年度卒業生

校友会報第28号

発行所　日本大学工学部校友会
福島県郡山市田村町徳定字中河原1
郵便番号　979－66
電話番号　郡山(0249)44－1327番
振替口座番号　(郡山) 1990番
発行日　昭和51年3月1日
発行者代表　会長　松山光克
編集者代表　事務局長　小野沢元久